

あとがき

長谷川三郎の名前を最初に意識するようになったのはほぼ30年前である。長谷川三郎著「モダンアート」(昭和25年、東京堂刊)を読んで感銘を受けたことを鮮明に記憶している。この「モダンアート」は瀧口修造著「近代芸術」(美術出版社刊)、オザンファン・ジャヌレ共著・吉川逸治訳「新しき芸術」(河出書房刊)とともに当時のぼくの現代美術についての入門書として机の傍らに経済・法律の書籍とともに置かれていた本なのである。

ところでこの本は今なお、ぼくの書架——いまや経済、法律の書物は殆んどみあたらないのであるが——に大事に納まっている。いま、とり出してながめてみると終戦後間もなく出版されたことから紙も写真も良質とは言えない。それにしてもモンドリアン、ガボ、マーレヴィッチ、ブランクーシ等の写真はどこから入手されたものであろうか、と今にして思う。赤鉛筆が引いてある——さすがにウスクなっているが——この本をめくると、なつかしい思いが湧き起るのである。当時ぼくは長谷川三郎は美術評論家だと思っていた。

その後、年月がたち、長谷川三郎は画家であることを知った。さらに山田正亮さんから、自分の先生は長谷川さんだと聞かされて驚いた。山田さんは氏の年譜に長谷川三郎に師事すると明記しておられる。

昨年、機会があって芦屋市の甲南学園甲南高等学校にある長谷川三郎記念室で

長谷川三郎の作品を初めて系統的にみる機会に恵まれた。そして、感じたことは長谷川三郎の絵は学者の絵だな、ということであった。さまざまな実験的な仕事を含んだ作品をみていくとこの作家の志の大きかったことがみえてくる。新しい芸術を切り開いていこうとする作家の熱意がみえてくるのである。当画廊のこの展覧会は15点余と必ずしも点数は多くないが、ほぼこの作家の大要を示していると思う。

前述の「モダン・アート」の内容は現時点では確かに古典的に過ぎるかもしれない。しかしわが国の現代美術の状況——少くもそれを受け入れる側の状況——は当時もいままさっぱり変っていないのである。長谷川三郎がわが国に絶望し渡米して3年後、サンフランシスコで客死したのは象徴的である。わが国の現代美術が可能性を含みつつも、相変わらず低迷している現状からすると、長谷川三郎の持つ意味はただいま改めて再認識されてしかるべきであろう。当画廊がこの展覧会を開催する所以もまさにそこにあるのである。

この展覧会のカタログには美術評論家早見堯^{たかし}氏から「長谷川三郎の外面的な文化的賭」を、また長年にわたり長谷川三郎の作品を見守ってこられた河崎晃一氏から「私論・長谷川三郎」をそれぞれ寄稿いただき感謝している。

最後に貴重な作品を快くお貸しいただいた甲南学園甲南高等学校、所蔵家の皆様ならびにこの展覧会開催についてご協力いただいた関係者各位に厚く御礼申し上げます。次第である。

1982年9月13日

佐谷画廊 佐谷和彦